

浄土

1989-4

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（普通郵便物） 第三二五号
平成元年三月二十五日印刷 平成元年四月一日発行
第五十五卷 四月号



小林





四月の秀句

花の寺少女の笑ひ二間越ゆ

飯田 龍太

花祭みづやまの塔そびえたり

飯田 蛇笏

青き踏み雲に曳かるる虚子忌かな

秋元 不死男

四月号



少善根福德の因縁を以ては、彼の国
に生ずることを得べからず。

——『阿弥陀經』

目次

巻頭所感

- 善巧方便と浄土教……………稲岡覚順……(2)
- <ずいそう…「つくづく法師抄」>
- 御忌に想う……………眞野孝信……(7)
- 死生共に煩いなし——
- 《花まつりに寄せて》
- いのちに感謝……………江島俊雄……(16)

童話の世界【I】

- 音(その一)——「スクスクってなんの音」——ぬのむらてつや……(25)
- 江戸の心を伝える……………細田隆善……(22)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <25>

- 海と山の狭間で……………木下隆一……(30)
- 我が思い出に住む犬たち(11)——

◇◇長篇連載◇◇

- 伝弘の生涯(4)……………松浦行真……(37)
- 大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

|| 卷頭所感 ||

善巧方便と浄土教

稲岡 覚順
いな おか かく じゅん

(大本山金戒光明寺法主)

一、善巧方便とは

善巧方便という言葉に對する老生の納得も不充分であり、しかもこのままでは看過出来ないものがあるので、この言葉に對する先輩諸徳の解説にも目を通して来た。

『新浄土宗辞典』改訂版・恵谷隆戒先生監修(四六三頁)の解説が一番判り安かったので、これによって或る程度の理解を得たつもりであった。

それによると、「菩薩が衆生を度するにあたっては、機宜に応じて自由自在に施設教化する巧妙な智用をいう」とあり、又続いて「菩薩の善巧方便の代表的なものとして、法蔵菩薩の四十八の大誓願がある」との所説に、老生は目を見張る思いの中に啓蒙された。

「菩薩が衆生を度するにあたっては、機宜に応じて自由自在に施設教化する巧妙なる智用」「又菩薩の善巧方便の代表的なものとして、法蔵菩薩の四十八の大誓願がある」

この二つの指摘に老生は心を引かれたからである。

機宜に應じて自由自在に施設教化する巧妙なる智用であるから上根上機には上根上機に適する智用がある筈であり、下根下機たる愚悪の凡夫には、又それ相応の施設があるべきである。

わが宗には真如実相第一義定の理を他力の実体とし、その実体の上に善巧方便を廻らして願を立て土を立て構する時、極楽は十万億土の西にあり、凡夫正しく往生の見を超えて十万億土の引摺をたのむ。この善巧方便を経には、「不思議智、不可勝智と説く」との説により、善巧方便による指方立相が本宗義成立上重要な意義をもち、指方立相こそ本宗の根幹であり、宗義の基綱であることが判る。

一一、宗務庁に於ける勸学会会議

処が旧臘十五日浄土宗務庁に於て勸学会会議が開かれ、席上畏友服部英淳勸学に会う機会があった。時間的余裕もなく、会議果てて後の談合の席であったので、老生は前掲の恵谷先生の所編を述べその見解を尋ねた。然る処服部勸学は即座に「あれは間違いだ」との一喝である。「どこがどう間違っているのか」と聴き正す余裕もなかった。

勿論服部勸学と老生の間には学研上や便学上の格差があり、即座の教示を求める事は無理だが、「あれは間違いだ」だけの一語のみでは頂けない。

この問答によって老生の善巧方便に対する疑念は一層深まった。

老生に判る様な書があったら送って頂きたい(少し無理だが)と申し入れ勸学も承知してく

れたが、今日まで何等の指示もない。

織田得能氏の『仏教大辞典』（五八九頁）には次の如き傾聴すべき所論がある。

「念仏の言は諸仏に通ずるも、諸大乘中念仏の言は独り西方の阿弥陀仏に限る。その故は念仏を以て一切衆生の仏国に往生せしむる誓願を建てしは、法界の諸仏中独り阿弥陀一仏なればなり」云々とあり、続いて、「西方と言うは釈迦如来の方便なり。東方日出づる処を以て万物を発生し、西方日没処をもって万物の終歸となせば、仏世情に準じて殊に西方を指定して、衆生涅槃の大歸所を教えしなり」と。

三、善導の指方立相観

如上の見解に基き機宜よろしきを得た所謂上根上機を対象とする教門は榮えた。ただし下根下機、愚惡のわれらを対象とする釈尊の善巧方便経、四十八の誓願教こそ素晴らしい凡夫救済経であった。

「十方に淨土多けれど西方を願うは、十惡五迷の衆生の生るる故なり」——これは四十八願中第十八願、一念十念の教えである。

「十方仏刹とは凡夫引接の巧言なり」

「そもそも極樂は有相の土なり、指方立相の教門凡夫往生の実現なり、極樂不遠とは仏の所見なり」

「罪惡の凡夫は相を立てて心を住せしむるすら尚得ること能わず。況や相を離れて事を求

むるは、術通なき人の空に居して舎を建てんが如し」

この愚惡憐愍の情が所謂指方立相そのものであった。人間に用いられている方角に基く西方であり、人間本来具有の取像性に根ざした立相である。

日想観の記述は更に具体的である。

「目を閉じ目を開くにも散失せざれ、たた睡時を除いて恒にこの事を憶え、斯の如く想するを名ずけてはば極樂の地を見る」とある。

正に釈尊は耆闍窟山中に於て、陽の正に沈まんとして天鼓の如き壯嚴の相を觀じ、而も春秋彼岸の正中の折に正に沈まんとする方こそ極樂の正門たらしめたのである。

これは耆闍窟山に集まる一万数千の弟子達に対し、韋提希夫人教化に用いられた教説の復況であつたのである。

四、釈尊教の世界伝播

釈尊在世八十年、印度、中国、日本その他各地に汎り、法門は八万四千に及ぶ。大乘小乗、聖道淨土と頗る広汎である。

日本に仏法の流布せしは欽明天皇の御代、すでに千四百年を経ている。その間聖德太子の如き篤信者ありと雖も、華嚴、律、法相、三論、成実、俱舍、天台、真言の伝風により絢爛たる仏教文化の花は日本に咲いた。

特に天台真言の難解難入の秘議は、愚惡低下の凡夫の対象ではなかつた。

特に四種三昧の苦行の如きは峻厳にして、よく修し得る者は少なかった。

これに關した逸話の一つを紹介させて頂く。

「南岳大師入成のきざみ、緒の弟子につけて曰く、『汝等方等般若四種三昧において、身命をかえり見ず修行すべくば、われ十年世にありて汝等を供給すべし』との給わせるに苦行に堪え難きにより、弟子等返答に及ばざりしかは、大師入成し給える。しばらくも存命せんとの給わん者をも、如何なる妄語をもかまえて、師の命惜しまんためには修行せんとこそ申しつづけけれども、始終かなうべからざる間、返答せずしてやみにしかば、師すなわち入成し給えり云々」とある。

五、結 語

已上は老生の愚見であるが、若し「それは間違いだ」の正しい納得がないままならば、浄土宗の秘義秘伝はくずれろ。

法蔵菩薩の四十八願の大誓願はどうなる。

指方立相の説話はどうなる。

二河白道や二祖対面の秘義は牽強附会の妄況となるのか。

かくては浄土宗は崩壊する。

浅学非才の八十三老翁は、一宗先輩諸徳の教示を期待している。特に服部勸学の奮起を俟つや切である。

◇◇すいそう……「つくづく法師抄」◇◇

御忌みよぎに想おもう

— 死生共に煩わづらいなし —



眞ま野の孝こう信しん

(八幡市正法寺住職)

御忌みよぎは、もと天皇皇后等の忌日に行なわれる法会ほうえを御忌会みよぎえと称していたが、元祖大師法然上人御往生の後、三百十二年を経て、大永四年(一五二四)正月十八日、後柏原天皇より、知恩院第二十五世超誉存牛上人に下された鳳詔ほうしうに「自今より孟春もうしゅんの月に過はば京畿門葉を集會しうかい

して一七日昼夜法然上人の御忌を修すべし」と宣せられて以来これを大永の鳳詔と謂い、民間人にあつては法然上人の忌日のみ御忌の称を用い、毎年正月十九日より二十四日の六日間、唱導師は鳳詔を拝戴し、歎徳諷誦たんとくふじゆ(追善のために、その人の徳をたたえた文を声をあげて

読誦すること)することになったが、明治維新以後は、その期間を四月十九日より二十五日までの七日間と改め、他の本山も御忌と通称して三日間の大法会が厳修されている。一般寺院にあつても年中行事の中で最も盛儀として参詣者多く、今でも三日乃至五日間の法会と法話が行なわれ、満堂の信者は祖師報恩の念をもって随喜されるのである。

年毎に修する元祖の御忌なれど

よわいかさねて追慕いやます(孝信)

元祖大師法然上人の御著「選撰本願念仏集」(二巻)は、元祖大師六十六歳のとき、建久九

三心

至誠心——真信心——真心をもって、真剣に、
深心——深信——信機——己がうつわを見きわめ、
信法——仏の本願を信受して、
廻向発願心——功德の一切を願往生の為にふり向ける。

年三月(一一九八)、九条関白兼実公の懇請を承けて、大師御みずから他力本願の深旨を述べて、念仏の法門が末代に相応する教法であり、浄土一宗の要義を説示されたもので、その巻頭に選撰本願念仏集 南無阿弥陀仏 往生之業、念仏、為先、の墨書があつて本文に入つてある。筆者は門人(第一章段——第三章段——安樂坊蓮西、第四章段——第十六章段——真観坊感西)で、その草稿本は廬山寺本として現存し、国宝に指定されている。

本書の巻頭に記されているように、浄土宗のお念仏は、三心具足の上で称える願往生の念仏である。三心の大切さは、高祖善導大師(唐)も観無量寿經に説かれる「三心」を詳釈されている。今、これを表示略説(注)すれば、

ただ一向に、お念仏を申す中に真剣な生活を営む。

といただけの念仏信者の心がまえで、「安心」と名づけ、元祖大師は「決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと、思ふうちにこもり候なり」(一枚起請文)との御遺訓である。即ち、三心は「助けたまえ」の一心に結帰する称名生活の御勸説は有難い。

往生と云うことに就いて元祖大師は、「此を捨て彼に往き蓮華に化生するなり。草庵目を瞑するのとき便ち是れ蓮台に跌を結うの時なり。聖衆の後に従つて一念のあいだに西方極樂世界に生ずることを得、故に往生と云うなり」(往生要集大綱)と説かれている。

蓮華と謂うのは、弥陀正覺の華とされ、阿弥陀仏の真生な覺悟の報果として構え出された淨域で淨土を表し、蓮の台に化生(托する)ところなく、忽然として生ずる往生人の姿であり、阿弥陀仏來迎の益を蒙る念仏人が、内に煩惱外に惡縁と虚偽迷妄に執着し、繫縛さ

れる境界を脱して、無碍の大活動と真生命を全うすることの出来る境界に超生することである。まさに不退轉の淨刹(清淨にして穢れなき仏刹)に、無生を証得(生死なき眞實のあかしだて)するのが往生の姿である。この姿を仏教では無生而生の往生と説き、高祖善導大師は「弥陀の淨土は無為涅槃界(一切の爲作、造作を離れた世界)」(法事讃、般舟讃)と言ひ、極樂淨土の事である。

さて、この極樂について、恩師故椎尾弁匡大僧正は、『如何なる苦しみの中にも眞實を見る』という極樂の眞意云々、又「説教坊さんが、極樂を説明するに八功德水とか、百味飲食自然に盈満するとか、とかく物質的に、實在的にばかり説教した弊が、禍をなしたのである。極樂世界とは、性起実相の世界(宇宙の万有を通じての眞實性に、欠くところのない眞の相を持つ世界)——(華嚴經)である。ほん

とうに生きる世界である。眞実生命の世界である」更に往生と念仏については「眞の生命から見れば、死ぬことはかかわりの多い五尺の身体からはなれて、眞実の自在を得た機会と云うので、眞実の生活に入った人は、普通死亡と言われる時にも往生するのである。往生の念仏は一切の除病や息災の念仏のような枝葉の念仏ではない。元より息災、除病の利益はないのではないが、これは往生念仏の『不求自得』の益であつて、病の中にも災難の中にも、眞実に生きて行く念仏こそ往生念仏の眞意である」と述べられている。

「今日の仕事を、南無阿弥陀仏の中に打ち込み、弥陀の指導を仰いでゆく時、いつ死んでも、安んじて往生が出来るのである。困難から逃げ隠れせず、それをそのまま、念仏に受けて進みゆく姿、これが元祖が七十三歳にしてご流罪にあわれても『田夫野人を教化す

ること年来の本意、今、この縁によつて之を果し得るのは朝恩である」と感謝された事業に照らしみて、浄土教が社会生活を通して、眞実の光りが出て来ることを確信して貰いたい」(椎尾弁匡著「信行の歩み」とも、講説されている。

時宜に適し機に応じて、原稿も持たれず、教学一途を揚げ、眞仏教は生活の指南なりとして、仏教界教育界は云うに及ばず、政界学界に席を置かれ、保育界経済界の指導をもされた恩師は、大本山増上寺のお居間で、ベツドの上蒲団に木魚を置いて、念仏しながら臨終を迎えられ、享寿九十二歳を一期として淨刹に帰えられた御命日が、このずいそうの刊行される頃かと、四月七日の還来指南を悦ずする「つくづく法師」である。(林靈法編「椎尾弁匡先生追悼録」の参照)

元祖大師の御伝記の中で、法然上人行状絵図四十八卷（国宝）（勅修御伝、四十八卷伝）は、門流を汲む者は勿論、日本浄土教の關係者必読の書である。元祖大師滅後約百年の頃、徳治二年（二三〇七）後伏見上皇の勅命を奉じて、舜昌法印撰の御伝記を奏進した行状絵図である。舜昌法印は比叡山東塔天台宗功德院の住僧で、後に知恩院第八世如一國師に師事し、知恩院第九世を継がれた。

この書に記された年代その他については、学説に異論はあるが、凡僧の私には、吾が元祖法然上人鑽仰の決定版として、念仏信仰の基盤として、或は今日を生きる糧として、更には畢命を期す渡世の杖ともいただいて、反復味読無尽の宝典である。凡僧机上に重宝させていただく浄土宗聖典の序に、

「……信なくして経文を見る譬へば宝の山

に入りて手を空して還るが如し、此書を読む者、須らく信よりして能く入るべし……」

明治四十四年五月 華頂老衲現有

とあり、法然上人行状絵図の流調な文語もさることながら、文言用字の卓越、文意悉く信を貫き、第一卷の緒説は三国伝来を説くに、「釈迦牟尼如来は無勝莊嚴の化をかくして、かたじけなく娑婆濁惡の国に入り給いしより……唐朝の善導和尚、弥陀の化身として……我が朝の法然上人、勢至の応現として……」と、尊師を仰信鑽歎するに情を仏意に託し、読者の信をより深く堅固に勧説されて、胸奥の信田を耕運し、追肥灌水の恵みに浴す想いで、味読の感は反復毎に深まり、無尽の告白こそ凡僧の至心である。

四十八卷の悉くを迎える筆勢の持ち合せはな

いが、常に引用される要目は別の機会に俟つとし、御忌奉修の当月に即して、第三十七巻を略説し、元祖大師御往生の次第を拜ませていただくこととする。

建曆二年（一二二二）正月二日より、お食事を充分おとりにならないためのお疲れが増した。三、四年前から、お耳とおくなり、お目もはつきりせず、見聞きにご不自由せられていたが、二根（お顔等皮フの色つやと神経）は今までとお変りなく、見る人は随喜し不思議に思った。二日以後はこと更に余言を交されず、ひたすら往生の事を話されて、絶えず高声（自らの耳に聴こえる程）の念仏を続けられ、睡眠の時には舌と口を常にうごかしておられた。同三日、あるお弟子が「今度の御往生は決定ですか」とお尋ねすると、「われもと極楽にありし身なれば、さだめて帰りゆくべし」と

仰せられた。又法蓮坊が「古来の先徳みなその遺跡があります。然るにいま精舎一字の建立もございません。御入滅の後、どこをもつて御遺跡とすべきでしようか」と。上人は「あとを一廟に占めれば遺法がゆきわたらない。私の遺跡は諸国に一ばいである。そのわけは、念仏の行を盛んにすることは、愚老が生涯をかけた仏道の勧めである。だから、念仏を修するところは、人や所を問わず、みなこれ私の遺跡である」と仰せられた。

十一日午前八時頃、上人はお床でお目を覚まされて、高声念仏しておいになった。そのお声を耳にした人は皆涙をながした。その時上人はお枕辺の弟子等に、「高声念仏せよ。阿弥陀仏の御来臨だよ。ここに居る皆が仏のみ名を称えれば、一人でも往生が出来ないと云うことはないほどにお念仏の功德はあらたかなものだよ」と讃歎されることには、昔ど

うりで、少しもお変りになった御様子がない。

「観音勢至をはじめ、諸菩薩や極楽の聖衆も来現されておいでます。奉拝しているか」とのお尋ねに、弟子等は「拝んで居りません」と申し上げるのをおききになって「ますますお念仏を申すように」と勸説なされた。

同日の午前十時頃になって、弟子等がお身丈三尺の阿弥陀仏のお像をお迎えし奉って、病床の右に立てまって、「この仏をお拝みになっておりますか」と申し上げると、上人は空を指さして、「この仏の他に又仏在します。拝めるかどうか。凡そ十余年このかた、念仏の功德が積って、極楽の莊嚴や仏菩薩のまことのお相を奉拝することは常づねのことである。然しながら年来は内に秘めて、何とも云わなかった。いまはいよいよ最後に臨んだので、このことを示すのである」と。また弟子等が、お仏像の御手に五色の糸をつけて、

「お取りになって下さい」とお勧め申すと、上人は「このような事は一般の人の儀式である。わが身においては、未だ必ずしも、そのようなことをする必要がない」と云われて、遂に糸を手になされた。

二十日の午前十時頃に、上人の草庵の上に紫の雲が流れるようにうかび、その中に五色の円形の雲があつて、図絵に画かれる仏の後頭部の円光のようで、路次を往き来する人が、処々でこれを見たのである。弟子等が、「この上に紫の雲がございます。御往生が近まつてまいりましたのですか」と申しますと、上人は「あわれなことよ、わが往生は一切衆生の為である。念仏の確信を得させるために瑞相を現すのである」との仰せであつた。

又、同日の午後二時頃になって、空を見上げて、目ばたきもなさらずに五、六回もあつた。看病の人々はあやしんで、「み仏の御

来現でございますか」とお尋ねすると、「そうだ」とお答えになった。

二十三日は『御遺訓一枚起請文』御撰述の日である。

又二十四日の正午頃に、紫の雲が広くたなびく。西山の水尾の峯で、炭焼きをする人々が十人余り、これを見て報告し、広隆寺より下って来た尼僧もこれを見て、訪ね来てこの様を話す次第で、これを見聞いた人々はみな、その有難さを喜びあった。

二十三日からは、上人のお念仏は、或は半時、或は一時、高声念仏休むことない御様子であった。

二十四日午後六時頃から二十五日の午前十時頃に至るまで、高声念仏がお体をせめるように間断なく続けられた。弟子五、六人が交替しながら、上人のお声を助けるように同唱すると、助音は窮屈なようであるが、御老体

の上、病悩の御身をもつて少しも怠りの御様子をあらわし給うこともなかった。この様なことは、未だかつてなかった事で、群集する僧尼や一般の人々みな感激の涙をもよおさない人はなかった。

二十五日の正午頃からは、念仏のお声は次第に微かになり、時々高声が交錯する状態である。正しく御臨終にお入りになったとき、慈覚大師の伝衣九条の袈裟をかけ、頭北面西にして、光明遍照、十方世界、念仏衆生、攝取不捨の文をとなえて、ねむるがごとくにして、息たえ給うた。音声が停止しても、なお唇舌をうごかし給うこと十返余り、お顔の色は殊に鮮やかに、御容貌は微笑まれているようであった。建暦二年正月二十五日の正しく正午である。御令八十歳。これは大聖釈尊と同じで、そのみならず、支干もまた壬申である。これは正に奇特のことではないか。一

一切の衆生を照し給う慈恵の灯は己に消え、
 切の衆生を撫育し給う仏日もまた没してしま
 った。貴賤の別なく衆人の哀傷することは、
 あたかも父母を亡くしたようであった、と記

されている。

元祖もとそう円光えんこう東漸とうぜん慧成えいせい弘覚こうかく慈教じきょう明照めいしょう和順わじゆん大師
 御忌ごよき上じやう酬しゆう慈恩おん。南無阿弥陀仏

(諡 号)

●元禄10年正月18日— (1697)

東山天皇

450回忌 円光 大師

●宝永8年— (1711)

中御門天皇

500回忌 東漸 大師

●宝暦11年— (1761)

桃園天皇

500回忌 慧成 大師

●文化8年— (1811)

光格天皇

弘覚 大師

●万延2年— (1861)

孝明天皇

慈教 大師

●明治44年— (1911)

明治天皇

明照 大師

●昭和36年— (1961)

昭和天皇

和順 大師

花まつりに寄せて

いのちに感謝



江^え島^{じま}俊^{しゅん}雄^{ゆう}

(鹿島市無量院住職)

釈尊の誕生

新しい平成の年も早四月、桜の花だよりも各地に聞かれ、心うきうきの新学期となりま

した。町や村には、「ピッカピカの一年生」が真新しいランドセルを背負って新鮮な笑顔をふりまいています。この時は正月の年のはじめの気分とはいささか違い、身の引き締まる時期でもあります。進学、就職、移動など

人生の節目々々の訪れる忘れない瞬間です。

卯月八日は、仏教徒として最も大切にすべき「釈尊降誕」の日。今から二千五百年ほど前、インドの釈迦族の王子として釈尊はお誕生、父の名は浄飯王、母は摩耶夫人であった。摩耶夫人は御出産のため、実家のあるコーリヤの町へとお里帰りの途中、ルンビニー園にて休息をされ、そこにたまたま美しく咲いていた無憂樹の花を取ろうとした時、夫人の右脇から男の子が生まれられたのです。すなわち釈尊は直ちに七歩あゆまれ、声高らかに、「天上天下、唯我独尊、三界皆若、我当安之」と叫ばれた。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道を一步超えた境地を顯す伝説であり、人間の生まれることの尊さのはかりしれないことを意味するものであります。そして天からは甘露の雨が降り注ぎ、地には七茎

の蓮の花が咲きみだれ、天地一切の祝福を受けてお誕生になったのです。

釈尊のお誕生の教示は、天地万物の生命の尊大さを私たちに伝えるものであり、過去・現在・未来に連なる縁起の道理を広く説くもので、人生の智慧と慈悲こそが、迷い苦しみの人生から、喜びと安らぎの人生へと転化してゆく、真の幸福の姿をば具現するものであります。

古来釈尊のお誕生を祝う行事は、「降誕会」とか「灌仏会」「仏生会」あるいは「浴仏会」「竜華会」などとも呼ばれ、広くは「花まつり」と通称され各地でとり行なわれている。「成道会」(十二月八日)や「涅槃会」(二月十五日)と共に、釈尊三大行事の一つであります。



——花まつり小景・象の上の花御堂と子供たち——

思い出の花まつり——今昔——

大東亜戦争に応召し、何とか無事に帰還できた師匠（父）は、復員後、戦後の不安定な時代に今一番大切な教化の事業は「青少年の教化」だと確信し、ボーイスカウト活動や子どもクラブ活動の推進に力を注いできた。その活動の中にも宗教的情操を導入し、今言われている「ふるさと創生」ではないが、地域の生活に仏教行事を取り入れ、少年たちの手づくりの「花まつり」を実現したのである。

市内の仏教会組織もこぞって協力してもらいスカウトたちの手造りによる等身大の「白象」を中心に、花まつり讃歌の音楽に合わせて行列する稚児たちと親たちの姿は、まさしく戦後復興の第一歩であったにちがいない。小生もその活動の中で育てられ、身をもって仏教

行事に参加し、釈尊の誕生をお祝いする「花まつり」の行事を通して、多くの人達との温かい心のふれあいを経験することができた。白象をリヤカーに乗せ、花御堂（誕生仏）を背中に安置し、紙テープや色紙で飾りつけ、スピーカーをセットして市中をパレード。行列を采配し行脚伝道する仏教会の僧侶や寺院婦人の人たち、行列に加わる善男子善女人、純粹に仏教徒としての心意気が伝わってくる一コマであった。町の人たちは賽銭箱に志を投げ入れてくれるのである。桜の花咲く公園のど真ん中での「灌仏会」、うるわしい稚児の舞（越天楽、法のみ山、子ども花まつり等）忘れられない懐かしい思い出である。

昭和も四十年代になり、日本の高度経済成長の中、世相の安定と日常生活の多様化、価値観の変化のためか、市中での行事が、一時市民会館を借りての舞台行事へと移り、盛大

さを極める時代もあったが、春先の各種行事の混雑に流されて、その後の活動の存続が危ぶまれ、地域的行事であった「花まつり」も徐々に忘れかけられ、消沈してしまうことになった。

その後、それぞれの寺々で細々と内々に続けられてきた「花まつり」の行事も、拙寺では幸いなることに、地域の子ども会やスカウト活動との連携から、何とか継続維持でき、単独ではあるが今日では保育園の行事と合体しての一大行事として、大きく位置づけられている。

花御堂のお釈迦さまへの灌仏のセレモニー。和順婦人会と保育園児による音楽法要、御詠歌の奉納や婦人会の舞、園児の出し物など。大へんなごやかなうちに老若男女の心のふれあいの場となるのである。

第一部（午前）がここまで……午後からは第

二部となり、小中学生の新入学と進級のお祝いをかねての「子供花まつり」となる。

最近では、子供たちの日常生活もクラブ活動や塾など大人同様忙しい毎日を送っているが、このような昔ながらの行事にふれさせることにより、「温故知新」今ある我が生活に反省のひとつきを持たせるのも、大へん意義深いことと思う。

しばらく止絶えていた市中での行事も、拙寺の行事とは別に日をもうけて、シティ「花まつり」として三年前より市内のJデパートに進出し、新しいスタイルの仏教行事として実施している。大へん興味ある行事として、ふるさと活性化に微力ながらその一翼をなっているつもりである。

デパートの「出会いの広場」に、白象と花御堂を安置し、その前での「花まつりセレモニー」、幼児の和太鼓のアトラクション、お

客様への甘茶の接待など、不特定多数の市民を迎えての市中行事は、これからの仏教行事の試み（他の地区ではやられていることとは思わが）として一考の余地があるうと思われる。

全国津々浦々、各宗各派にてこの「花まつり」の行事が取り行なわれているが、今一つ国民的インパクトを与ええないのは、さみしい限りである。地道ながらもそれぞれの分野の中で、活動を積み重ねていくより他ないのであろうか。

いのちを感謝する

人間の命は、普通母親の胎内にその生命をいただいた時にはじまるとされるが、「仏本行経」や「過去現在因果経」などに説かれる釈尊の前世の物語をうかがうと、生まれる前からの尊い因縁の結びつきに、気付かせられ

れるのである。「仏前結婚式」にて「行華」の作法をするのは、雲童子（釈尊シッダルタの前世）と賢者（釈尊の妃となるヤシヨダラ姫の前世）の七本の花にまつわる故事にあやかっていることであり、先年瀬川瑛子さんの歌で大ヒットした「命くれない」の詩の一番に、

生まれる前から 結ばれていた

そんな気がする 紅の糸

だから死ぬまで ふたりは一緒

「あなた」「おまえ」夫婦みち

命くれない 命くれない ふたりづれ

とあるが、命の誕生に向けての前世からの尊い因縁があることを、作詩の吉岡治師は心をこめて詩に歌いこんでおられる。

ややもすると私の命の存在は、私だけのものとして軽く考えがちであるが、今日の「物

……物……物……」の物絶対（金絶対）の時代こそ、真の「いのち」の尊さに思いをいたさなくてはならないのではなからうか。

各地で発生している幼児誘拐事件や肉親の殺人事件などは、善良な市民の心を痛めつけ、踏みにじるばかりのまことに心悲しい社会現象である。犯人の真情は論外のことながら、現代社会の病理体質の根本的改善こそ急がなくてはならない今日の課題であらう。

○いのちを尊ぶ

○いのちに感謝する

心の奥底より、我がいのちの存在する意義を認識し、尊い「いのち」に感謝しながら、生かされていることの喜びを味わうことのできる日が、いつでも、どこでも、だれにでもあることが、何よりも幸せなことである。

江戸の心を伝える

ほそ だ りゅう ぜん
細 田 隆 善

(東京・江東区勢至院住職
俳号・豊明)

私たちの日常生活、衣食住、風俗習慣の多くは江戸時代に基礎づけられたものが多く、その上に明治以降の西洋文物を取り入れたものである。最近江戸ブーム、各地に江戸村が出来て観光客を楽ませている。東京都において広大な江戸東京博物館が建設されようとしているが、一と足先に江東区に深川江戸資料館が開館し好評を博している。最近の江戸ブームは、明治の行政が、フェノロサをはじめ心ある外人の指摘にもかかわらず、過去の文物を捨て急速に外国文物を取り入れて一新しようとした風潮に対する反省警鐘でもある。

江戸は東京の前身、新しい新天地に当時世界一の人口を擁し日本の政治の中心であった。産業革命が起きてロンドンもパリも人口が都市に集中し百万都市になったがそれまで江戸は世界一の人口に膨れ上がった。人口の増加は、大名が一年おきに江戸に詰める参勤交替の制度が確立し、かつ大名の妻と長男は江戸に常住させる妻子在府の制度が定着したからである。これによって江戸が日本の総城下町として発展し、一大消費都市として全国の富の半ばが江戸で消費され、打ち続く江戸三百年の泰平によって江戸文化が発生し発展するようになった。この制

度は封建社会制度下にあっても、江戸と地方との文化の交流を盛んにした。江戸で歌舞伎十八番の芝居が盛んになれば、忽ちこの芝居が地方に伝わった。同じ封建社会制度のプロシヤと江戸は大いに異なっている。そして江戸は日本の縮図でもあった。

江戸の地名は東京湾、隅田川または日比谷の入江の入口の意味からつけられた。江戸は五百年前、康正二年（一四五六）太田道灌が築城したこともあったが文明十八年（一四八六）道灌亡きあと寂れてしまった。以来北条氏の小田原城が関東の中心となった。ところが天正十八年（一五九〇）小田原の北条氏は豊臣秀吉によって滅ぼされた。このとき徳川家康はこの戦に参加し、旧領（駿河、三河、遠江、甲斐、信濃の五ヶ国）と引き替えに関東を与えられ、江戸をその坂下町にすることになり、同年八月一日江戸に入った。江戸時代この八月一（朔）日を八朔といって五節句の一つとして祝日記念日としていた。それまで江戸は淋しい漁村であったが、家康により城下町建設が進められた。慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の戦に勝利をえた徳川氏は天下の覇権を握り、大名はつぎつぎ江戸に証人を置きこのため大名屋敷が増えていった。同八年江戸

幕府開設に伴い江戸は日本の政治の中心となり、同十一年から大規模な江戸城の建設が始まり、各大名の江戸建設に協力させた。これによって急速に人口が増加をしていった。

人口の過密状態を続けてきた江戸は、『明暦三年（一六五七）の大火に見舞われ、江戸城をはじめとして江戸の六割が焼失し、十万人の死者を出した。これによって幕府は再びこのような災害を防ぐため大規模な都市再開発を実施した。先ず本所深川の埋立によって市街地を拡大、都心の神社を移し、グリーンベルトの広小路を各所に造り、大火の原因となった各町の材木置場を永代島（深川）に集結して木場を創設し、大江戸を造成した。それが完成したのは元禄十四年（一七〇一）松の廊下の事件のあった年である。大江戸の面積は八十七平方キロ、明治十一年東京十五区が出来た地域である。人口は明確ではないが百三十万、世界一の人口であった。人口は武家関係が六十五万、寺社関係が五万、町地関係が六十万といわれている。面積の六割が武家地、二割が寺社地、あとの二割の土地に人口半ばの市民が町地にひしめいていた。江戸は江戸城をはじめ、諸大名の屋敷、旗本御家人の屋敷

などが大半を占めているので、江戸は武家の町といわれた理由である。

江戸は広大な江戸城が特色である。江戸は総城下町として建設され、江戸城は外郭と内郭に区別する。先ず外郭は外濠の内側のことであり、ここに武家屋敷、町屋、寺社が計画的に配備された。外濠は東に隅田川、浅草橋、御茶の水、水道橋、飯田橋、市谷見附、四谷見附、赤坂見附、溜池、幸橋、数寄屋橋と連続した外濠の水を巡らす広大な地域が江戸城の外郭である。内郭は内濠に囲まれた城内のことで、本丸、一ノ丸、三ノ丸、西ノ丸、北の丸などがあつた。内郭の総面積は三十万七千坪、わが国最大の城郭である。本丸は將軍の居所であり、幕府政治の中樞が置かれている。ここに五層の巨大な天守閣がそびえ高さ地上から五十八・六四メートル、諸大名を威圧する偉容を誇つたが明暦三年の大火に焼失し再び建造されることなく五十年の歴史であつた。今は当時の石垣だけを見ることが出来る。本丸は表、中奥、大奥に区分する。表は幕府の中央政府が置かれ、中奥は將軍の公邸、大奥は御台所（將軍の妻）、側室たちがいる將軍の私邸である。本丸は弘化二年（一八四五）の資料による

と一万一三七三坪、これまた世界最大の木造建造物であつた。

深川江戸資料館は江東区が往年の深川区役所跡に建造し、昭和六十一年十一月十六日からオープンした。天保ころの深川の町並の一部を原寸通りに建造したもので、船宿、火の見櫓、米屋、八百屋、旅籠、屋台、水茶屋など江戸時代の下町の面影を偲ぶことができる。また数年後に東京都が建造する江戸東京博物館は延べ三万平方メートルを越える世界屈指の巨大な都市博物館である。この都市博物館に、「江戸」と冠称がつけられているのは、東京の前身の江戸に重点が置かれるからである。この博物館の建設を早急に念願して、私が東京都に昭和五十三年六月三十日陳情し、翌年七月十日、これが可決決定を見て、東京都が建設することになったものである。ところが以後紆余曲折を重ね、数年後には下町に建設されるものである。これがオープンすると江戸ブームに一段と拍車をかけることになるであらう。

(童)(話)(の)(世)(界)
〔I〕

音(その一)——「スクスクってなんの音」



ぬのむらてつや

ぼくは地面におちた南天の実。

このぼくが南天の実だということを知ったのは最近でした。それをおしえてくれたのは、ぼくをふとんのようにつつんでくれていた木の葉のおばさんでした。

茶色になった葉っぱのふとんは、すこしガサガサしていてかたいところもありましたが、雨をよける屋根になってくれましたし、暑いお日さまをさえぎる傘にもなってくれたので

す。つめたい雪がつもったときには、こおらないようにしっかりとつつんでくれました。

そればかりではないのです。

長い尾をふって、ギャアギャアとやかましい声でなくオナガドリがやってきたときには、葉っぱで、ぼくをかくしてくれたのも木の葉のおばさんでした。あのオナガドリときらた長いくちばしで、なんでもつつきだして食べてしまうのですから。

こうしてぼくを守ってくれたのが 木の葉のおばさんだったということをおしえてくれたのは 土の中のミミズのおじさんでした。木の葉のおばさんは そんなことをひとつもいいません。

木の葉のおばさんがおしえてくれたことは ぼくが南天の実であることと どうしておばさんの葉っぱの中にいるのかということだけでした。

おばさんは ぼくに次のようなことを話してくれたのです。

「そうだったわ。ちょうどきょねんの今ごろだったかしら。わたしは まだ芽から出たばかりの緑のきれいな葉だったのよ。

高い木の上でおいしい空気をすって お日さまの光をいっぱいにあびて どんどん大きな葉になっていった。

そんなとき あなたを見つけたのよ。

あなたたちは わたしの木の下 of 小さな池のそばにうわっている南天の木にみのつていた。真つ赤な実がたくさんついていたのでとても目立ったの。そのひとつひとつが仲のいい兄弟みたいにくつつきあい赤いほっぺをよせあつて楽しいおしゃべりをしているあたにかい家族みたいだった。

火がもえているようなそんな南天の実はどこから見えたので だれもがその姿をうらやましくおもったわ。

しかしそれはいつまでもつづかなかった。あらしのとおりすぎた次の朝 バサバサとヒヨドリのむれがやってきて 南天の木にむらがつたかとおもうと たちまちに実をつついて食べてしまった。さいごに残った実をいっぴきのヒヨドリが口にくわえて わたしの木の枝で食べようとしたのに うっかりし

ておとしてしまったのね。それがあなたなのよ。

あたしは それからずっと木の下におちているあなたを見ていた。

鳥や虫にたべられないかしら、人間にふみつぶされないかしら、風にとばされないかしら、水にながされないかしらってね。

あなたのまわりの実やたねが くさってしまったり どこかへ行ってしまったりしたのに あなただけはふしぎとどこへもいかないでそこにいた。

そのうちに あなたはだんだんとうすよごれて黒くなり ところどころの皮もすりむけてとてもあわれだった。

できることなら あなたの实の上におちてかばってあげたいとおもった。でもわたしは葉っぱだから自分からうごくことはできないし 風がふいたらいつどこへとばされて行く

かわからない。

どうなることかと毎日毎日がしんばいばった。

ある秋の夕方 つめたい風といっしょにわたしは枝をはなれて青い空を舞った。どうか南天の实の上におろしてくださいとおいのりしながら。そのねがいがかなったのかしら。わたしは あなたの上にふんわりとおちたのよ。ほんとうにびっくりした。まるで見えない糸でつながっていたみたいにな」

そんなことをなつかしそうに話してくれた木の葉のおばさんは このごろすっかりしらびて 茶色だった葉はぼろぼろになっていました。いまにもくずれてしまいそうです。

ぼくはいっしょうけんめいに声をかけました。

「おばさんおばさん 木の葉のおばさん」
しかし木の葉からはなんの返事もありませ

ん。

「ずっといっしょにいてくれたんでしょ。

これからもいてちょうだいよ」

泣きながらいうぼくの言葉にも おばさんは答えませんでした。

「おばさん、おばさん……」

ぼくは泣きながら眠ってしまったのです。どのくらいいたったのか わかりません。

スクスク スクスク

そんなかすかな音で目をさましたぼくはあたりを見まわしました。

いったいぼくはどこにいるんだろう。今までなにをしていたんだっけ。ぼんやりしていた頭に少しづつ これまでのことが思い出されてきました。

「ああそうだった。木の葉のおばさんにまもってもらって葉っぱの下にいたんだ。するとおばさんもそばにいるはずなんだ」

ぼくはまわりを見まわしながら……また呼んでみたのですが かえってくるのは

スクスク スクスク

という音だけです。

いったい何の音なのでしょう。

ぼくは音のするところをじっと見つめました。たしかそこには あの木の葉のおばさんがいたはずですよ。もういちどそこへ声をかけてみました。

「おばさんたら、かくれていないで出てきておくれよ。ぼくはひとりでさびしいんだから」

それでも おばさんはあらわれません。

ただ スクスク スクスクという音がするばかりで そのあたりには葉っぱのような形をした黒い土があるだけです。

ぼくは またさびしくなって泣き出しそうになりました。そのとき土の中からまた

スクスク スクスク

という音がしました。澄んだその音をきくとすこし気持があかるくなるようでした。さびしくつても なんとなくひとりではないような気がしたのです。

だれかがそばにいて ぼくをばげましてくれているようにおもいました。

土の中のスクスクは ずっと続いてきこえています。

ぼくが眠っているときでも

スクスクスク スクスクスク

遊んでいるときでも

スーク スーク スーク

笑っているときも

スック スック スック

泣いているときも

スー スー スー

ねずみがやってきて ぼくをいじめてかじ

ったときも いたいたいといいながら スクスクの音をきいてがんばったのです。きくと助けてくれるとおもって。

そして とうとう

スクスクスク スクスクスク

大きな音といっしょに ぼくは土の中で芽をだしたのです。

「ああ やったあ！」

ひとつぶの南天の実が いま南天の木になろうとしています。あの真っ赤な実をたくさんつけるために。

そのためには これからが大変なんです。

なぜならば いま人間がぼくの芽の上に石をおこうとしているのです。そのときどうやって地面へ顔を出せばいいのでしょうか。

それにしても スクスクっていったい何の音なのでしょう。

(つづく)

木

下

隆

一

随

筆

集

25

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(11)—

木きの
下した
隆りゅう
一いち

蓮見小五郎に、突然、

「子犬を飼ってみないか」

と言われても、私の一存では決めかねることであった。たかが子犬一匹と言えども、生命あるものである。ましてや食糧難の時代に、犬を飼うというのは容易なことではなかった。小五郎の目を見ると、単なる思い付きや冗談で言っているのではないのが分かって、これは困ったことになったぞと、私は思った。小五郎は次に生まれる子犬を、本気で私に呉れるつもりなのである。言葉では一応「飼ってみないか」と当たりは柔らかだったが、目は「飼え！」と言っていたのである。

「考えておきますよ。僕だけじゃ決められないことだし」

「そりゃそうだ。親御さんの考えもあるだろうから」

そう言った時、小五郎の目の中に入った、何が何でも飼わせてみせるぞという強い意志を表していた光が消えた。長年香具師として培った勘で勝ったと思ったのであろうか。

「お宅のような可愛がってくれる家に貰って貰えば、子犬も幸せだもんね」

その言葉を期に、私は早々にその場を退散した。これ以上いると、何を言われるか分からないと思ったからである。

今にして思えば、昭和二十三年というのはいろいろのことがあった年であった。その第一は学制改革で、四月からそれまでの中学校は高等学校に改められ、三原中学も浮城高校と改名された。従って私たちの学年は中学四年から高校二年へ、自動的に移行したのであった。浮城うきしろという名称は、三原城の別名から採ったものである。築城当時、海の側から見ると、城が海上に浮かんで見えたところから名付けられたと聞いているが、海岸近くに構築された城なら、どこでもそう称よばれていたのではないだろうか。確か讃岐の高松城もそう称ばれていたように聞き及んでいる。大方は船乗りがそう呼んで、操船の目印にしていたのであろう。三原という名を冠することができなかったのは、三原女子師範の付属女学校がその名を攫って行ったからである。わずかに創立五年の歴史しかない学校が、どう転んでも太刀打ちできない程古い歴史と伝統を持った女学校には勝てなかったのである。広島県下の教育界の力関係の差と言ってしまうばそれまでだが、これにはかなり口惜しい思い

をした。そして翌二十四年、学制は手直しが行われ、両校は統合されて三原高校となった。一見対等合併のようだが、我々男の側からすると吸収合併されたような気分で、甚だ意気揚がらぬものがあった。建前は男女共学だったが、今まで通り授業は別々に行われたから、何ら変わるころはなかったのである。

いろいろのことの第二は、福岡県で開かれた第三回国民体育大会秋期大会に、私が出場したことであろう。種目は「団体徒手体操」というもので、数人がそろって同じ演技をするという、見戯にも等しい、有り体に言えばラジオ体操に毛の生えたようなものであったが、ランニングシャツとパンツさえあればできる種目であったから、考え出されたのであろうが、その後数年にしてこの種目は廃止された。蓋し当然の処置といえよう。ただ、何故私とそのメンバーに選ばれたのか、いまだにもって謎である。

十月の終わりに十一月にかけて、わずかに四、五日の間の出来事であったが、私にとつては、この遠征は一つの転期であったと思う。

今まで極く軽い気持ちで親しんできた俳句に、本格的に取り組む気になったのである。原因は何だと聞かれても答えに窮するが、石炭景気に湧いていた洞海湾一帯の有り様やそこに暮らす人々の逞しさ、荒々しさ、優しさ、人情の細やかさ……。それに瀬戸内とは違う季候や風物に接したことが、私に俳句に対する新しい目を開かせてくれたとだけ言っておこう。見るもの聞くものすべてが新鮮で刺激的だったのである。

蓮見小五郎から、子犬が生まれたから見に来ないかと言ってきたのは、十一月の終わり

頃だったと思う。夏休みも返上で「団体徒手体操」の練習に追いまくられ、犬のことなど考える暇がなかったと言えは聞こえはいいが、私が蓮見小五郎を避けていたというのが真相である。練習は確かにきつかったし、その時故障した右膝は宿痾となつて、四季を問わず私を悩ませているが、それよりも「子犬をやるから飼え」と言われるのに、確答できないことが辛かった。

「牡が三匹、牝が四匹。……母子共に健全です」

後半だけを聞けば、人間の子供が生まれたのと錯覚しそんなことを言つて、小五郎は一方的に電話を切つた。

「どこから？」

「蓮見のオッさん。犬が生まれたから見に来て」

「わざわざ何でそんなことを……」

「この前、と言つても五月頃会つた時、今度生まれたら、好きなのをやるって言われてたんだ」

「ただやるって言われても、あの人は子犬を売つて生計の足しにしているんだし……」

「お宅のような家に貰つて貰えば、子犬は幸せだってさ。随分うちもおッさんに見込まれたもんだ」

「オッさんという言い方はおやめ！」

「じゃあ、オヤジさんにするか」

母はそれには答えず、火鉢の側の座蒲団にべたんと坐ると、溜め息をついた。

「今度もハチの子かしらねえ」

「多分。何にも言っていなかったけど。……お母ちゃん、うちでも犬飼わないか」

「子犬ねえ……。可愛いでしょうね。でもねえ、うちにはハチがいるし……」

寒くなったせいとか、その頃ハチは減多に來なくなっていたが、それでも時々思いがけない時にやってきて、母を喜ばせていた。しかし急に老け込んだ様子で、口の周辺が心なしか白っぽく感じられ、よく見ると口髭の何本かが白くなっていた。そして冷氣が古傷にしみるのか、起居振る舞いに昔ほどの敏捷さはなかった。

「ハチがいるからって、あれは元々余所の犬だよ。勝手に通い番犬しているだけで」

「そりゃそうだけど。自分の子供と分かってにしているにしても、やはりうちに犬がいるとなると、ハチは悲しむんじゃないかねえ」

「じゃあ、子犬を飼うのは反対なんだね」

「反対はしてませんよ。ただハチの心情を察すると可哀そうで……」

母と問答していてもきりがないので、私は言った。

「蓮見のオッさん、いやオヤジさんも見に來いと言っているんだから、一度見るだけは見えてやろうよ」

その日の午後、何故かしぶる母を引っ張るようにして、お宮の下の小五郎の家まで行くと、雪駄の裏底を作る機械は撤去されていて、ガランとした土間の隅に密柑箱を二つ並べ

た程の箱が置かれており、その中にうずくまった母親のハチと六匹の子犬が窮屈そうな格好で眠っていた。

「機械は？」

と訊くと、

「ほかしました。もうあんなもの作って儲かる時代じゃなくなったからね。欲しいという奴がいたんでやつちやつた。

小五郎はさばさばしたものだ。彼のことだから、そのうちきっと儲け仕事を探してきて始めるだろうと私は思った。

「ハチやお手柄だったねえ、六匹も。お婿さんはあのハチなんでしょうね、みんな茶色だから」

母がハチの頭を撫でながら言うと、

「そりゃ間違いありません」

と、小五郎は胸を張った。

「全部茶色は茶色だけど、濃いのと薄いのがいるのはどうして？」

私が訊くと、

「そりゃあお兄いちゃん、人間だって兄弟がまるっきり同じ顔つきしてるとは限らないじゃないの」

と言って、眠っている子犬を一匹無造作に掴み出した。急に動かされて驚いた子犬は、

『江戸物語』

細田 隆 善／豊明／著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

- 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録
- 定価一八〇〇円【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

△発行・発売△

ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一
電話(〇三)二六九―一二九三 二六七―六六三七
振替(東京)七―一一〇九三／千一六二

キョンともキイともつかぬ悲鳴をあげて小五郎の手の中でもがいた。ハチはキッと首を抬げて警戒姿勢をとったが、子犬が小五郎の手の中にいるのを認めると、また元の姿勢に戻り、目を覚ましてキュウキュウ鳴き声をあげてうごめく子犬たちを、一匹一匹丁寧に舐めて落ち着かせた。

「この子を見てごらん。これは一番チビの牡だが、かつさいな奴だね。いい番犬になると思うよ」

そう言うとき小五郎は、その子犬を私の方へ差し出した。全身柔毛で覆われた子犬は、まるでよく出来た縫いぐるみのようであった。

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^ぐ の 生涯
(四)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

続々・廃仏毀釈の嵐の中で

「——いまや各地方で無住の寺々をつぶし、墳墓を移し、寺領を没収する。僧侶の中にも喜んで還俗してゆくものあり、

なるほど廃仏の命こそでていないが、実状は中国の「三武の廃仏」^(注1)に近い。本邦に仏教あつてより一千四五百年、かくのごとき(神仏分離のような)令を聞かず。ひそかに思うに、今より数年にして、大いに仏教廃絶の勅命が出てこよう。(筆者

意識」

この一文は福田行誠が「釈門新規三策」の冒頭部分に記したもので、歴史の「現場」に立ち会った彼自身の時代認識を示している点でも、まことに興味深いものがある。

なるほど現代から振り返れば、「仏教廃絶の勅命」はいささかオーバーという気がしないでもないが、しかし行誠が「諸宗同徳会盟」に提出するためにこれを書いたのは明治二年（一八六九）のことである。それは廃仏毀釈の嵐がもつとも強く吹きつづけている時期で、彼が深刻な危機感を持ったとしても、不思議ではない。

そうした時代認識につづいて、彼はこう書きすめてゆく。

「——（仏教廃絶を予想する）理由に五つ

あり。神官久しく仏家に圧倒せらる。今にして多年の讐あだをかえそうとするであらう、これが一。儒者、僧侶を憎む。今にして神官たちと力を合わせて仏家にむかつてくるであらう、これが二。さらにそのすき間をぬってキリスト教が教化の攻勢をかけてくるに相違ない、これが三。そして四は、僧侶が遊惰なために教えも法も萎縮しており、いたずらに坊室を華麗にし衣服を華美にして、俗人のごとく僧位の高きを誇り、名利をむさぼって慈しみと施しの意識が希薄なことである。おそらく役人がこれをにくんでその榮華を奪うだらう。（同）」

とここまででは、仏家にとつての時代のワル役が一通り顔をそろえる。ついで筆はいよいよ本格的に仏教者自身に向けられてゆく。

『第五に於て今の僧侶に五失あり、一に衣食住に沈着す、二に檀越に愛執す、三に戒俟を蔑視して自ら濫行を制すること能はず、四に互に宗見を固執して他門の善言を拝せず、五に専ら虚飾を張つて実効の解行を務めず。如上の五失、以て自ら廃滅を招くに足れり』

辻善之助は行誠のこの一文を評して、「…

…言々句々、肺腑より出で、内に深く自ら悔い、奮つて僧弊を一洗せざるべからざるを覺つた様子がまざまざと見られる」とその著「明治仏教史の問題」に書いているが、實際、行誠は一貫して僧侶の悪弊に鋭い目を向けた指導者であつた。釈門新規三策のあと、同じく諸宗同徳会盟へ提出するために翌三年五月に書いた「議案五題」のなかでも、またさらに四年七月の「寺院廃合に関する意見書」で

も、先の五失に加えて廃寺の理由十三ヶ条を書きつらねるなど、いらいち数えあげれば枚挙にいとまがないほど、繰返しそれを指摘しているのだった。

それというのもこの上人は、いま襲いつつある危機を乗り越えて仏教が生きつづけるには、僧侶が原点にかえつて持戒持律という行儀を素朴に護るしかないという立場をとり、広く仏教界の覚醒をうながしていたからである。彼はまたそれによつて、諸宗同徳会盟の精神面での指導者ともなつていたのである。

ちなみに諸宗同徳会盟というのは、一世をおおう廃仏毀釈運動に対処して、ごく自然に仏教界にうまれてきた、超宗派的な一種の戦略合議機関である。明治元年十二月まず京都で発足し、こえて翌二年四月東京でも第一回会合が開かれたのだが、おのずとここには各宗の英僧傑僧といったすぐれた人材が集まっ

た。仏教各派が超党派的に知恵をだしあったというのは、むしろ仏教が日本に渡来していい、未曾有のことであった。

それはともかく、オーバーと思えるほど、福田行誠が僧侶にたいし鋭い批判を放っているのは、ちょっと今日からは想像できないほど、僧の墮落がひどかったからである。その片鱗はすでに記したが、それは寺院が吉利支丹禁制の取締りの一端をにない、その延長として戸籍を扱うことになって、寺檀制度が確立したことから始まっている。寺院が行政の末端を受け持つ代償として、幕府は寺院に保護をあたえたのである。その同じ轍を、明治政府の神道保護政策が踏むことになるのだが……。

ところで福田行誠の予測だが、「廃仏」の勅命こそ出なかったけれども、じつは半ばは的中していたのである。

明治四年（一八七二）一月の「寺領返上」命令、翌五年四月の「肉食妻帯蓄髮勝手たるべき事、法用の他は人民一般の服着用苦しからず」の布告、それらを追うようにして出た、僧侶にも苗字みょうじの呼称を義務づける令などがそれである。大隈重信はその座談「大隈侯昔日譚」のなかで、それらの布告中、肉食妻帯の解禁だけは何とも迅速なる実施をみると、なかば揶揄的に語っているが、しかし心ある僧たちの胸中はそれどころではなかった。以上の布告のどれ一つをとっても、僧侶の存在否定につながらないものはなかったからである。

寺領返上は、寺院生活そのものを決定的におびやかした。それでなくとも、神仏分離令にもなつて発生した廃仏毀釈は必然的に、檀家が寺から離れていくという現象を生み、葬儀なども、仏式をやめて神式に、あるいは

神式葬儀の様式を見よう見まねで自家で勝手に片づけてしまふ、いわゆる「自葬」がつぎつぎと普及するという状態が、その一方にあったからである。いかに自葬が広がっていったかは明治五年六月に、自葬を禁ずる太政官布告が出ているのでも察しられよう。

そうした潮流の中で僧侶たちが、無檀化ないしは廃寺への恐怖をつのらせていた矢先の寺領返上である。打撃は彼らの経済的絶望感を、いやがうえにも深刻化させたにちがいない。

そしてまた、肉食妻帯や苗字の義務化などは、仏家の伝統と風習の破壊そのもので、多くの高僧たちは「ついに仏教の最期がきた」と長嘆したほどであった。なかでも福田行誠はもっとも過敏に反応した一人で、

——これ滅法破仏の濫觴^{らんさう}たりと、驚愕の至りに耐へず。

と、新政府に建言したが、もとよりそれに耳をかす役人は、一人もいなかった。

明治五年というのは神仏分離関係の法令がもっとも大量に、かつ矢つぎ早やに公布された年なのだが、岩井智海が「廃仏毀釈の思い出」の中に書いている、説教の指針「三条の教則^(正)(教憲)」が公示されたのも、この年の四月のことであった。

これがまた神道をふくめた宗教界に、ちょっとしたパニックを巻き起こした。どう演説していいか、わからなかったからである。

というのも、三条の教則といったところで、全部で四十一文字にしかすぎない抽象的な「公民の心得」みたいなものである。口達者な人なら、三十一文字の和歌一首をネタに一時間でも二時間でもしゃべるかもしれない

いが、そんな演説の名人上手など、そうざらにいるものではない。一ばん困ったのが「一陽来福」のはずの神職であつた。これまで人前でしゃべったことといえば、祝詞のりとくらいのものであったからである。

しかし僧侶も困つた。三条の教則を説くに、その三条のこと以外にではいけないというのだから、喩たとえ話にしる仏教や宗旨のことなど、カケラも口にすることができない。

まるで賭け事に負けて落語という落語に封印されてしまった嘶こ家かみたいなので、話題に変化をもたせようにも、もたせようがないから、話が続けられなかった。

それはそれとして、筆者が当時のことを研究した文献を読んで驚いたのは、なんと三条の教則が公示されてほどもなく、延べにして五十冊をかるく超す「三条の教則を説くにはこうして」といったたぐいのハウツーものが

多量に出版されていることである。もちろん書名は「教則三条説教要集」とか「童蒙教則往来」、さては「説教訓導道志留倍」といったぐあいでそんなに軽くはないが、なかには「三則教の捷徑おしとちみち」のようにキワものくさい題名のものも、少なからずあつた。ちなみにこの書の著者は、江戸から明治にかけての小説家・仮名垣魯文をもじった仮字垣魯文センセイというのであつた。

この前年の明治四年、ある種のデマが西日本を中心に広がって、僧侶たちを大いにおびやかすという出来事があつた。

それは政府から地方へ派遣された宣教使の、なかに、たまたま「神仏本道」とか「仏法利益」「生死業惑」といった問いを十二題出して、僧たちの力だめしまがいのことをした者がいた。デマはそこから発した。答えられた者はよいとして、答えられなかった者は還俗

させ、その者の住持する寺院は片づけて古跡にしてしまふのである。

これには各宗のお坊さんがアワをくった。

事情は浄土宗においてもかわらない。「こうしたうわさが流れているが真実か」という問いあわせが、知恩院に殺到した。

驚いたのは知恩院も同様で、当時、学僧が多かった増上寺に、模範答案を作成するよう依頼した。その答案は「北総逸士」という筆名の人物によって書かれ、「十二問答」と題された。この北総逸士はのちの知恩院七十五世で初代浄土宗管長となった養嶋徹定（がいてつじやう だいてい）と推定されているが、彼は当時、諸宗同徳会盟（東京）に参画して、福田行誠とともに指導的な役割をはたしていた人である。知恩院はその「十二問答」をうけ、一種のトラの巻として全国の浄土宗寺院に大急ぎで配布した。各宗とも似たりよったりの周章ぶりで、一つには

そういう騒ぎが前例としてあり、ハウツーものでのにわか勉強も下地は十分にできていたのである。

それにしてもこれらは、消費税の施行が決まると待ちかねたようにその解説本がどつと書店の本棚を占領する現代の光景とそっくりで、商人の機敏さもさることながら、それらを読破して危機を乗りこえようとする日本人の物凄いバイタリティには、ただただ脱帽のほかはない。わずか百年と少しで、世界で一、二といわれる経済大国にのしあがった源泉の一つが、ここにも噴出しているのだった。

しかしながら、三条の教則関係がベストセラーを続けていたおかげで大迷惑したのが、ヒマつぶしに寺の説教所へ出かけては説教を聞くのを楽しみにしていたお年寄りたちだったという。壊れた蓄音機ではあるまいし、どこへ行っても同じネタの、それも含蓄皆無な

説教を毎日毎日聞かされたのでは、たまったものではない。昔の日本人はいまと違って話芸には聞き巧者が多かったからなおさらで、ついに日本全国、どこへ行っても説教所は神社・寺院を問わずガランドウという珍現象をみるにいたった。

ついでに書いておくが、この「説教」という言葉はこの時期に初めて使われたした官製の新語なのである。つまり仏法を説くのは嚴禁、説いていいのは三条の教則だけだから、自今、説教なる語を使えとなつて、それまで使っていた法話ないし説法という言葉はついにオクラとなつてしまった。専制政治の恐ろしさをまざまざと見せつけて、背筋の寒くなるような話である。

それにしても、説教所のガランドウには僧侶も困った。それだけではない。神官たちは三条の教則などそっちのけで仏教の悪口をネ

タにしゃべることもしばしばだというのに、坊さんが少しでも仏教の話をするとたちまち密告がゆき、「お上」からお叱りをこうむる始末だったからどうにもならない。

一方、新政府の役人たちもこの問題では、頭をいためていた。聞き手が集まらねば三条の教則もへつたくれもないからで、こういうのを機が熟すというのであろう、五年八月二十七日、各宗派から代表者の連名で、

——三条の教えは教えを説く規準と考えて、これにさからうことなく各宗派の趣旨をまじえつつ説いてゆけば、さらに大衆は感動をもつて三条の教えを身につけてゆくとするが、いかがですか（筆者意訳）。

という伺い書がとどくと、たちまちゴー・サインをだした。もつともそれには「片言隻句といえども三条の趣旨にもとるなかれ」と

いう但し書きがついていたが。

維新から三年ほどつづいた「打ち壊し流行」から思うと、まさにサマがわりとしかいような光景である。

まず、変わってきたものとして、役所自身をあげねばならないだろう。「仏教が憎い」一点張りの国学者風はしだいに姿を消してゆき、逆に、宗教に政治が介入することを批判する者が、政府高官のなかからもでてきた。当時、米国駐在弁務使^(注5)だった森有禮^(モリキョウ)である。

彼は英文で著した評論「Religious Freedom in Japan (日本における宗教の自由)」を、はるかワシントンから太政大臣の三条実美にあてて送ってきた。政府の政策批判になりかねないテーマなのでわざと英文で書いたのかもしれないが、この渡米直前にも彼は廃刀論を主張して、朝野に物議を沸騰させた。廃刀論が正論であるにもかかわらず、森一流の欧化臭とと

られて非難を浴びるあたり、つねに時代よりも二、三步さを歩く人物の悲劇といえるかもしれない。森は明治の日本にはなくてはならない識見の持主だったのだが、やがてそのために命を落す^(注6)ことになる。

仏教界もまた、変貌をとげていた。いつまでも政府に、生残りを嘆願してはいなかった。反転して彼らは、政府の政策自体に、批判の目をむけるようになっていた。この年の一月、欧州へ旅立った真宗・西本願寺派の島地黙雷^(シマヂモクライ)が、かの地から政府にあてて送ってきた建議文は、その第一号と評していいものであった。黙雷はその中で政治と宗教を混同するなど説き、三条の教則が幼稚すぎて宗教はおろか、教えともよべないと言葉鋭く反駁^(はんぱく)していた。その一方でまた仏教界には、新風が内部から吹きおこっていた。この廃仏毀釈ほど僧侶たちに明確に、幕府の保護政策のもと、のん

びりとふんぞり返って生きてゆけた時代が過去のものとなったことを知らせたものはなかったからである。

すでにして仏教界から去るものは去り、明治五年になってなお留まっているのは、皆まではないわな^(注8)いまでも、あくまで三宝を護るという強い意志を持った者が大半であったことは、疑いがない。近代仏教への道は、そこから開けていった。

その第一は、いやがうえにも高まっていた教化への関心である。

「三条の教則」のハウツーものが飛ぶように売れたことでも察しられるように、教化こそ僧の使命の本命であることを、いまや疑う者はだれもいなかった。仏教を信ずることによって心やすまる人びとを一人でも多く獲得し、その輪をひろげてゆくことは、とりもなおさず仏教がこの国で生存しつづけることに

つながるのである。

明治五年九月、真宗・東本願寺派の箕輪対岳によって、日本仏教史上はじめて石川島監獄で教誨説教が行われたのも、その延長線上のことであつたろう。もちろんまだ、説教の中心を「三条の教則」から踏み出させることはできなかったろうけれども、この史上初の教誨説教が、宗派独自の信仰核心を交えつつ語ってもよいことになった直後に行われていることに、深い興味を覚えるのは筆者のみであらうか。

この物語の主人公もまた、まだ少年ながら、仏教人として生きてゆくことが安易でないことを、肌で感じた一人であつた。そして彼は、教導職試験の受験勉強を通じて、説法こそがすべてであり、これに生涯をかけようと、肝に銘じていたのである。岩井智海は、さきにも引用した「廃仏毀釈の思い出」のなかで、

こう綴っていた。

『さればこの際、どうしても一歩進んで精神的に目覚め、精神仏教を叩きだすやうにせねばならぬ。さうすればよし寺がなくなっても、仏教が世界を支配する時代が来るやうにならうと思ふ。又仏教の真理を開いて来たら、必然に寺は潰れはせぬ、又和尚もなまけ者にはならぬので、それ故どうあつても御維新の廃仏毀釈を生ける教訓として、今は伽藍の方はどうやら復興したが、精神的方面の復活は果してどうかを深く考え、廃仏毀釈は今尚潜行的に続きつゝあり、かの反宗教運動の如き、或る意味から云へば御維新以上であることを思ひ、もし仏教界が現在のような状態であつたならば早晚第二の廃仏毀釈が蒸し返されるであらうことを思

つて、大に戒心するところがあらねばならぬのである』(鈴泉遺芳)

(つづく)

(注1) 三武とは中国の北魏の太武帝、北周の武帝、唐の武帝をいう。いずれも仏教の弾圧を行った王たち。主因は道教と仏教の対立であり、それに政治的経済的理由がからんでいるといわれる。日本の廃仏毀釈は神仏分離令から偶発的に起きたが、この三武の場合はいずれも王の意志による政策として実行された点が異なっている。なかでも最も苛酷をきわめたのが北魏の太武帝で、道教の信者だった彼はまず長安の僧を皆殺しにし、仏像・経巻を焼き、ついでこの仏教弾圧政策を全土に及ぼした。このため国中から僧と尼の姿がなくなつたといわれている。

(注2) 辻善之助(一八七七—一九五五)。歴史学

者。東大教授で史料編纂所初代所長。

広汎かつ史料を中心とした日本仏教史の研究で知られ、著書に「日本仏教史」全十巻、「日本仏教史研究」全六巻のほか「日本文化史」全七巻、「増訂海外交通史話」などがある。一九五二年文化勲章を受章。

(注3)

前掲。一、敬神愛国の旨を体すべき事
二、天理人道を明かにすべき事
三、皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事の三ヶ条をいう。

(注4)

養鶴徹定(一八一四～九一)。久留米市生まれ。六歳で同市の西岸寺光譽禪庵について得度。天保三年(一八三二)江戸増上寺に留学、宗戒阿脈をうける。岩槻の浄国寺、浅草誓願寺、小石川伝通院などの住職をへて知恩院へ。その間、廃仏毀釈時代には諸宗同徳会盟で活躍、また浄土宗初の管長となった。

「十六羅漢図賛録」「諸山藏経考」「臨

終行儀」など著書多数。また鹿児島・不断光院、隠岐・闍隆寺など多くの寺を創建し行学ともにすぐれた傑僧だった。

(注5)

明治三年から五年(一八七〇～七二)まで存在した。後の公使相当官。

(注6)

森有禮(一八四七～八九)はのち初代文相となり日本の近代学校制度を定めたが、国粹主義者に暗殺された。

(注7)

島地黙雷(一八三二～一九一一)。浄土真宗の僧で山口県生まれ。廃仏毀釈期には同宗の赤松連城と共に活躍したが、明治五年から約一年間、本山命令で宗教事情視察に欧州へ派遣された。三条教則批判はその産物。福田行誠を諸宗同徳会盟の行面での理論の雄とするなら、島地は政府批判派の雄で、政教分離と信教の自由を主張してやまなかった。

(注8)

仏・法・僧をいう。

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十五巻 四月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年三月二十五日

印刷

平成元年四月一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八八二一八七番

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

安居香山 著

緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、
緯書の成立とその種類、
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇ ◇ B5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇ ◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒一〇二 東京都千代田区隼町三一

TEL(〇三)二六三一四八八五 振替(東京)一一一七三三四

緯書は迷信でもなければ、異端の書でもない。
れっきとした儒教の思想の流れである。

それは、漢代の時代思想を代表し、それ以後の中国思想にも深く根をおろしているのである。

第五十五巻

四月号

昭和十年五月二十日

(第三種郵便物認可)

毎月一回一日発行

平成元年三月二十五日印刷

平成元年四月一日発行